

政治によって変わる幸せがある!!

参議院議員 辻 泰弘

1929年に発表されたプロレタリア文学の代表作である「蟹工船」がブームとなっています。「蟹工船」は、過酷な労働を強いられた労働者が団結して立ち上がるまでを描いた、小林多喜二の作品です。

ワーキングプア、派遣難民、ネットカフェ難民などと言われる社会現象が広がる中で、10～20代の若者、30～40代の働き盛り世代の共感を呼び、文庫本の売り上げが急増。海外のメディアも「日本の格差社会の証拠」と注目し、取材が続いているようです。

4月末の大阪高裁判決は、偽装請負の立場の労働者の全面勝訴でしたが、原告となった若い労働者は、「これからの日本を支える人たちをを痛めつけて、日本の将来があるとは思えない。人をモノみたいに扱う働かせ方は今後一切やめてほしい」と語っていました。

「にんべんに動く」と書いて「働く」という字になることが示すように、人間にとっての労働は、その人の人生・生活にとって極めて重要な、死活的な意味を持っています。

労働運動も政治活動もめざすところは人間の幸せにあると思いますが、その幸せは人間の日々の営みの中で重いウェイトを占める雇用・労働の状態の幸せ度にかかっており、幸せの実現は、雇用・労働の状態の幸せ度をいかに高め得るかに大きく依存すると思います。

今から7年前の2001年6月、小泉内閣は、「構造改革に関する基本方針」（いわゆる「骨太の方針」）を閣議決定しました。その中では、「医療、介護、福祉、教育などの分野に競争原理を導入する」ことが打ち出され、以後の政治はそれまで以上に生身の人間に冷たい政策の連続。その基本は今日まで続いています。

「競争・効率・自己責任」、「単純な小さな政府論」、「規制緩和万能」の論理の貫徹の中に人間の幸せはない。このことに、あらためて思いを深く致します。

政治によって変わる生活があり、社会があり、幸せがある。明日を信じて闘いましょう。